



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

痕跡と祈り メルヴィルの小説世界

著者	橋本 安央
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029123

氏 名	橋 本 安 央
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	乙文第143号 (文部科学省への報告番号乙第389号)
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位授与年月日	2019年10月16日
学 位 論 文 題 目	痕跡と祈り メルヴィルの小説世界
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 西 山 けい子 (副査) 教 授 新 関 芳 生 千 石 英 世 (立教大学名誉教授)

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、アメリカの古典的作家ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-1891) の散文作品を論じたものであり、全11章から構成される。それぞれの章において、代表的な長篇、中短篇小説が一作品ずつと取り上げられている。伝記や執筆過程といった側面に加えて、神学を基盤に、歴史学、考古学、地質学、精神医学や視覚芸術等、多種多様な補助線を引いたうえで、メルヴィル文学の本質を、近代における〈祈り〉の概念の中に見出し、精読をつうじてその諸相を描き出している。

第一章「棄子 (すてご) の夢」および第二章「エイハブの涙」は、メルヴィルの代表作とされる『白鯨』 (*Moby-Dick; or, The Whale*) を論じるものである。第一章では、物語の舞台たるピーコッド号の船長エイハブと、語り手かつ平水夫のイシュメールという二人の人物をめぐり、両者が夢と悪夢の中に生きる棄子という共通の属性をもつことに着目する。ともに旧約聖書に由来する名を与えられた人物として、エイハブが〈父〉を求め、イシュメールが〈母〉を求める様相が、聖書とのインターテクスチュアリティにおいて追究される。また、議論の細部において、テキスト生成のプロセス分析が導入され、両者の間に存する感傷主義の差異を浮かび上がらせる。狂気に近づくエイハブの現実感覚は、自己が他者であるような特有の自己意識の二重化をはらむが、そのエイハブにとって、白鯨にたいする憎しみこそが自己救済につながる過程となりうる。ことが提示される。この議論を引き継ぐ第二章は、昨今では全体主義的暴君と評されることが多いエイハブの、不滅の復讐心の背後でひそかに流される涙 (第132章) に着目する。涙も涸れたエイハブの意識に浮かぶ、農耕や草刈りのイメージに、生命再生のサイクルからも疎外されて白鯨との死闘へと突き進む「鉄の人」の哀しみがひそむことが明らかにされる。

第三章「父の肖像」と第四章「自己という謎」では、それぞれ、長篇作品『レッドバーン』 (*Redburn*) と『ピエール』 (*Pierre; or, The Ambiguities*) をめぐり、〈父〉という系譜学上の主題が検討される。前者においては、父の旅を反復するレッドバーンによる、父の像の乗り越えと破壊が、後者においては、家族の系譜学的基盤を断ち切って比喩的に「孤児」となるピエールによる、自己破滅のダイナミズムが、精緻な修辞分析をつうじて詳述される。問題作『詐欺師』 (*The Confidence-Man: His Masquerade*) をとり上げた第五章「狂気の鏡」は、歴史主義的視座も踏まえつつ、19世紀前半期にアメリカ国内において一世を風靡した精神療法、モラルトリートメントの言説を検証したうえで、詐欺師がその言説を利用して人々を騙す過程を分析する。慈愛精神という大義を利用して他者に信頼を説く詐欺師が、自己とアメリカ社会の欺瞞と狂気を、合わせ鏡のように映し出すさまが解説される。

第六章「テクスチュアル・クーデター」は、メルヴィルの遺作『ビリー・バッド』(*Billy Budd, Sailor*)の草稿研究に依拠したうえで、ビリー・バッドという人物における、身体上および隠喩上の「殴打」行為に焦点をあてる。ビリーを起点とする暴力性が、クラガートとヴィアという、他の作中人物に伝染していく関係性が浮き彫りにされ、最終的にはそれが、公私の間で引き裂かれた美徳の〈父〉ヴィアの苦悩に収斂していくさまが検証される。第一長篇作品『タイピー』(*Typee: A Peep at Polynesian Life*)をめぐる第七章「永遠の風景」は、語り手トンモが南海の孤島の自然に向ける眼差しの中に、ピクチュアレスク美学、考古学、地質学的な意識と知識が混在していることを分析したうえで、そこに永遠性を接続させる作者の〈祈り〉の姿を浮かび上がらせる。第八章「道化の祈り」は、短篇作品「コケッココー！」(“Cock-A-Doodle-Do!”)の修辞分析をつうじて、幻視する語り手の戯画的かつメタフィクショナルな自己演出の中に、救済を求める切実なる想いが埋め込まれていることを前景化させる。

短篇作品「ピアザ」(“The Piazza”)をめぐる第九章「幻視のゆくえ」は、八章を踏まえ、現実の困難からの救済を求める語り手の、妖精探しの旅路を詳細に検討する。従来の先行研究が見落としてきた点であるが、方角的には決して見えるはずがないものを語り手が目にするという、光学上の矛盾を手がかりに、〈祈り〉と芸術が存立する最後の磁場として、ピアザという空間を読み込んでいる。短篇作品「エンカンターダズ」(“The Encantadas, or Enchanted Isles”)を論じる第十章「痕跡と文学」は、主としてその第ハスケッチをめぐり、水難事故で夫と弟を失った混血女性ウニヤの記憶の痕跡を、絵画的フレームを分析することで浮かび上がらせる。沈黙をつうじて語られる類いの哀悼という痛切な主題を、作品の行間から読み取る論考である。最終章たる第十一章「死の虚空、痕跡の生」は、メルヴィルの代表的短篇作品「バートルビー」(“Bartleby, the Scrivener”)において、バートルビーという存在に取り憑かれた語り手が、彼の痕跡を内在化する姿を、「震える」という行為の分析をつうじて論じる。物語を語る行為そのものに、バートルビーという絶対的な他者の痕跡に囚われた語り手の、死者に捧げられた〈祈り〉の営みを読み取る試みである。

なお、本論文の巻末には、メルヴィルが執筆した重要な評論文「ホーソーと彼の苔」(“Hawthorne and His Mosses”)の全訳が収められており、かつ、この評論に関わる文学的、文化的、政治的な背景にまつわる詳細な註釈が付されている。

論文審査結果の要旨

本論文は、橋本安史氏の長年にわたるハーマン・メルヴィル研究の成果として、公刊されたものである。ユダヤ＝キリスト教の宗教伝統から離れたことで、アンテベラム期のアメリカ社会から冒瀆的とみなされたメルヴィルが、逆説的にも、浄化と救済を求める〈祈り〉の作家であることを、精読をつうじて論証している。

従来の先行研究を振り返るならば、西洋思想史の中にメルヴィルを位置づけ、メルヴィルがニーチェに先行してニヒリズムの無神論世界を提示したと論ずる系譜がある。ヘンリー・A・マリー(Henry A. Murray)やキングズリー・ウィドマー(Kingsley Widmer)、わが国の寺田建比古などが、その代表的論客として知られる。こうした思想史的背景からのメルヴィル理解は、ある種常識的なものとして、定着していると言える。一方、昨今のアメリカ文学研究の趨勢は、歴史主義的、政治学的立場から論じる方向に傾いており、メルヴィル研究もまた、その流れのなかにある。本論文は、そうした思想史的、歴史主義的知見も踏まえてはいるが、そこから一定の距離を置き、個別の作品を文学作品として徹底的に精読したうえで、総体として、〈祈り〉という営みの普遍性を読み込もうとする。キリスト教の文脈のみならず、原始宗教的とも言える概念として〈祈り〉をとらえ、近代における神(＝父)の不在の状況にあって、ニヒリズムよりも救済を求める精神をメルヴィル文学に読み取ろうとするところに、まずは本論文の最大の特質と独自性がある。

本論文で採用される基本的な手法は、メルヴィルという博覧強記の文学者にふさわしく、語源や引用、作品全体と細部とのあいだの有機的関連性等を踏まえた、新批評的アプローチに近いものである。それ自体は正統的とも言える、決して目新しいものではないが、本論文ではそれだけにとどまらず、必要に応じて、伝記や執筆過程といった側面に加えて、神学を基盤に、歴史学、考古学、地質学、精神医学や視覚芸術等、さまざまな補助線が引かれ、議論に奥行きと広がりを与えている。そして、それらがきわめて文学性の高い、独特の個性を有する文体によって叙述されていることが本論文のもうひとつの特徴である。メルヴィル作品が有する文学性を、論じる文体そのものが前景化させるという、稀有な特性によって、本論文は、アカデミックな研究論文という枠を超え、文芸評論の領域に入ろうとする、ユニークな試み（エッセイ）となっている。

全体として本論文は、浄化と救済を求める〈祈り〉という、大きな主題を掲げながらも、作品に基づく細やかな分析を徹底的に積み重ねていく手法をとる。死者の痕跡を内在化した者が発する、声にならぬ苦しみ声としての、あるいは自己救済を求める営みとしての、〈祈り〉の情念を読み解く本論文の試みにおいて、手がかりとされるのは、たとえば連鎖する農耕のイメージや、作中人物がみせる一瞬の逡巡、狂気の自己言及、時制の転換、反射作用の物理的矛盾、反復される震えといった、テキストの小さな裂け目である。それら細部の検討に始まる議論が、途中から驚くほどの深まりをみせ、作品全体の本質に迫ろうとする。各章が個々の作品論として充実しているだけでなく、全体として、メルヴィルという作家の精神を独自に提示することに成功している点で、本論文はメルヴィル研究に大きく寄与するものと評価できる。

論文本体はもとより、本文に付された註釈に入念な配慮がなされていることも、特筆すべき点である。巻末に収められた評論文「ホーソーと彼の苔」の翻訳は、難解で重厚なメルヴィルの英語を、格調高く、読みやすい日本語に置き換えたものである。とくに、この翻訳に細部にわたって付された註釈は、1850年前後におけるアメリカ北東部の知的風土を理解するために有用なものであり、学界に資するところは大きい。

本論文の独自性を明確に打ち出すため、序論として、全体の枠組みが最初に提示されていたならば、本論文の理解への助けとして有効であっただろう。橋本氏が本論文で用いる主要な操作概念、キーワードである、「祈り」「痕跡」「浄化」「救済」「感傷」等の言葉は、一般的な意味とともに、宗教的・精神分析的・哲学的・文学理論的な意味をときどきに響かせる。なかには、氏独特のニュアンスが込められていると思われる語法もある。テキスト細部の丁寧な読解から、高度に抽象的な思考へと大胆に移行する議論の橋渡しとして、これらの主要概念に関する説明がまとまったかたちでなされることによって、論点はいつそう明快になったのではないか。

そのような点はあるにせよ、総体として見ると、本論文は、メルヴィル研究において異彩を放つ独創的なものであると言ってよい。本論文は、2017年の商業出版の後、各種の主要学術専門誌において書評対象に選ばれており、それらすべてにおいて高い評価を受けている。これらの事実からも、本論文が日本におけるメルヴィル研究の新たな地平を拓くものであることは明らかである。

提出論文の審査委員3名は、2019年7月23日に実施した公開発表および口頭試問、論文審査の結果から、橋本安央氏が本論文によって博士（文学）の学位を受けるに値すると判断し、ここにご報告申し上げます。